OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『ガリア』50 号記念シンポジウム ： 「時の経過」要旨
Author(s)	
Citation	Gallia. 2012, 51, p. 81-84
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24303
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『ガリア』50 号記念シンポジウム：「時の経過」要旨

（大阪大学フランス語フランス文学会第 68 回研究会、2011 年 3 月 5 日開催）

司会者報告

岩根　久

シンポジウムのテーマの「時の経過」は 50 号記念号のテーマでもあり、このテーマの発案者の一人として今回のガリア司会および、「測れない時間と測れる時間―16 世紀の 2 人の詩人ロンサールとデュ・バルタスの場合―」と題して話題を提供させていただいた。

「測れる時間」というのは物理的時間、あるいはそれに基づく暦に代表される制度的時間のことであり、16 世紀に大きな変革があったことは周知のとおりである。一方、「測れない時間」というのは人間の思念の中の時間であり、文学が捉える情感の上の時間もそれに相当する。

16 世紀における文学上の表現の例として、ロンサールの『続恋愛詩集』（1555 年）のソネ 35 番の表現、「時は過ぎ行く、時は過ぎ行く、恋する人よ、いや、時ではなく、過ぎゆくのは我々なのだ。（Le tems s'en va, le tems s'en va, ma Dame : / Las ! le tems non, mais nous nous en allons,）」に見られる時間への着目と否定表現による意識の喚起、またデュ・バルタス『聖週間』（1578 年）第 1 日目 19 行目以降の表現、「神の口より発せられた揺るぎ無い布告が（…）全ての始まりを告げた：全てが時間の内にではなく、時間の前でもなく、時間とともに生まれた。私はここで混沌の時間のことを語っている。というのも、年、世紀、季節、月、日などの時間は、星々の輪舞によって節目をつけられてこそ存在するのだから。」における観念上の時間と物理的・制度的時間の対比を紹介した。

最後に宮崎駿監督の映画『ルパン三世　カリオストロの城』（1979 年）に登場する「クラリスの指輪」に彫られた「銀の山羊」に 1517 という年号が記されており、この指輪が財宝の謎を解く「時計塔」と結びついているお話をした（この話題が一番うけたような気がするのは気のせいだろうか）。

ラシーヌの作品と時間

藤本　武司

古典主義理論の模範とみなされるラシーヌの悲劇。どうしても規則の枠をはみ出しがちなコルネイユの作品が、議論を引き起こすことでかえって古典主義理論

の形成に多大な貢献をした一方で、ラシーヌにとっては、三単一、真実らしさといった規則はその作品の内的必然であった。中でも、時の単一の規則については、アベ・ドービニャックの言う「作品のすべての葛藤を収める一日」が巧みに選ばれているのはもちろん、この「一日」が、作中ポリフォニックに現れる詩句によって効果的に呼び起こされ、その特権的性格が強調されている。さらに、筋（劇行為）の点でも、ラシーヌ悲劇の動因となるものは、舞台上のやりとりの中から生じるのではなく、すでに完了した過去の中にあり、それが登場人物の語りをとおして現在のなかへ突如侵入するという形をとる。悲劇の「一日」に至る経緯を語るこの台詞は、一般に作品の呈示部（exposition）を成すが、その緻密に構成された過去の語りは、強烈な詩的喚起力をもって登場人物を圧倒しつつ彼らの行為を規定するという点で、それ自体が劇行為となっているのである。「場面でのやりとりになるべく時間をかけないように、舞台をできるだけ大団円に近い時点から始める」べしとオービニャックは説いたが、優れて「言葉の劇」でもあるラシーヌの作品では、ほとんど宿命的と言ってよいほど強力な過去を前に主人公が破滅してゆく、という劇行為を表現するのに、―たとえ一時的な迷いや思い違いがあるにせよ―時間的広がりはほとんど必要なかったのである。

ディドロ『運命論者ジャックとその主人』における「時の経過」

安部　朋子

この作品に流れる「時間」について特徴的なのは、(1) 架空の“作者”と“読者”が対話するメタフィクションの世界 (2) ジャックと主人の旅が行われている「現在」(3) 機会があるごとに挿入される 20 以上の挿話が保っている空間、これら 3 種類のレヴェルの時空がそれぞれ拮抗して存在しているという点である。それぞれ独立したエピソードは、はっきりとした年代を示す指標を持たないため、歴史的な時間軸には組み込まれず、いわば時間の秩序の外に置かれているといえる。こういった作品構成は、過去から未来へと流れる安定した時の流れを拒否し、常に変化にさらされている世界のイメージを提示することに一役買っている。

こういった物語内部の時間に対して、ディドロが執筆を行った現実の時間も考慮する必要がある。なぜなら、『運命論者ジャックとその主人』という作品は、1771 年にその枠組みが作られ、1778 年～ 1786 年の間の雑誌連載期間中に加筆修正が重ねられた後、現在私たちが手にする形になったと考えられているからである。つまり、実際の制作の現場ですでに複数の時間の重なり合いが重要な要素として作品の完成に影響を与えていたのだ。

以上のように、ディドロは物語世界を歴史的な時間に位置づけることを意図的に拒否していると思われる。それはおそらく、物語の普遍性や「教訓」の提示に

主眼が置かれているからであろう。ただし、ディドロが提示する「教訓」は単純な一つの物語で提示できる絶対的な真実ではない。作品に盛り込まれる多数の挿話は、時間の枠を超え、しばしば矛盾をはらみながら様々な状況に応じた様々な真実の可能性を指し示すのである。

バルザックと「時の経過」―激動の時代の職業作家

岩村　和泉

革命後、あらゆる政治的変転を経験したフランス 19 世紀の文学は、識字率の向上、印刷技術の進歩、新聞などの定期刊行物の爆発的な増加にともない、かつてない数の読者を抱えることとなった。その一方で、小説というジャンルの文学的価値は、詩や韻文劇に比べて低いとされていた。このような状況を職業作家として生きぬいたバルザックの作品は、二つの一見矛盾する命題に貫かれているように思われる。まず、小説が同時代の大衆に読まれ、必要とされるためには、彼らが生きている「今日の社会」を理解することを助ける役割を果たさねばならない。作家は、物語を現在と過去の因果関係を明らかにするための装置として用い、またできる限り物語の時代設定と執筆・発表時期を接近させるなどの工夫をした。一方で、小説は、時を越えた、「どんな時代でも読める」だけの価値を持っていなければならない。文学テクストが大量生産・大量消費される時代に自らの作品の「耐用年数」を延ばすため、作家は「現在の虚構」から一定の距離をとり、テクストに執拗な修正を行い、人物再登場の手法で虚構の人物を主な参照先に指定することで、小説を自転させた。自らの作品は同時代の人々には理解されないと考え、未来の « happy few » に向けて書いていたスタンダールとは異なり、同時代の読者と未来の読者の両方を同時に想定し、「今」を描きつつ普遍性を目指すという矛盾した態度が、バルザックのエクリチュールを特徴づけている。

『アルテンブルクのくるみの木』における
マルローの時の経過を超越するものへの眼差し

上江洲　律子

小説『アルテンブルクのくるみの木』は、処女作以来、マルローが、物語という形式によって追い求め、提示し続けてきた主題「死に対峙する人間の在り方」の到達点となる作品である。同小説において、マルローは、語り手「私」と「私」

の父という2つの世代の物語を通して、それぞれ、第二次世界大戦および第一次世界大戦を背景に、死に囚われることなく行動する名もなき人物を描くことで、世代ごとに媒体とする人物像を変えながらも変わることのない人間の在り方を示している。それは、まず、小説のタイトルに掲げられた虚構の町アルテンブルク（語義に「古」という意味を含む）にそびえ立つくるみの木がメタフォリックに表象した後、小説の最後に刻まれた「最初の人間」（アダムとイヴを示唆する）という言葉に収斂していく人間のイメージである。端的に言えば、個人の死を超越した、あるいは、時の経過を超越した原初的な人間のイメージに他ならない。この小説は、マルロー自身の第二次世界大戦での体験や第一次世界大戦に従事したドイツ軍将校の手記が織り込まれるなど歴史的なエピソードを含む一方で、主題となる人間については聖書を踏まえた「非」歴史的なイメージを展開していると言えよう。その後、マルローは、人間の在り方の探求の場を芸術論へと移行させるが、それは、例えば『アルテンブルクのくるみの木』に登場するくるみの木の彫像といった芸術こそが、同作品で見出された人間のイメージを体現することを前提とするのである。

（掲載は研究会当日の発表順）